

七月二十二日

明日、おばあちゃんがうちにくる。

先月、いなかでひとり暮らしをしていたおばあちゃんが、なべの火を消し忘れた。あやうく、火事になってしまったところだったらしい。

ゴミ出しもちゃんとできてないので、部屋から異臭がすると、近所の人からの苦情もあった。

それで、おばあちゃんにうちのマンションへきてもらって、いっしょに住むってことになったのだ。

「おばあちゃんはお年で、いろいろもの忘れするけれど、やさしくしてあげようね」って、ママが言っていた。「ママにもおまえにも、めいわくかけるけど、よろしくな」って、パパが神妙な顔をして、頭を下げて言った。



キエノさん

作・藤江じゅん

画・新井由木子

わたしの部屋は、おばあちゃんの部屋になった。

わたしは、三畳間の納戸にお引っ越し。

部屋はせまくなったけど、そのかわり、まえからほしかったミニドレッサーと、ベッドと勉強机と収納がちゃちゃまとめられた新品の家具を買ってもらった。

おばあちゃんに会うのはひさしぶりだ。

まえにいなか泊まりに行ったのは、二年前。おじいちゃんの三回忌のときで、わたしは四年生だった。

あのととき食べた、おばあちゃん手製のお漬物、ものすごくおいしかったなあ。

おばあちゃんはこの顔で、「そんなに気に入ったんなら、あなたの家へ送ってあげるよ」って言って、宅配便でお漬物を何回か届けてくれた。